

2. モスクワ・アルヒーフ資料による スポーツインター史の最新研究

——アンドレ・グノの2つの論文について——

上野 卓郎

グノと2つの論文について

1993、94年にベルリンで個人的に交流したアンドレ・グノ（ベルリン生まれのフランス人、当時ベルリン自由大学スポーツ科学研究所研究員）がドクターアルバイトの過程で発表した2つの論文を取り上げる。彼のドクターアルバイトは『赤色スポーツインターナショナル。コミンテルン政策とヨーロッパ労働者スポーツの要求の間で』として1998年に博士論文に結実した¹⁾。彼は現在フランス・ストラスブールの大学に職を得て、国際スポーツ史学会事務局長を（仏・独語が母語で英・露語も自由な語学力によると推察するが）担当している。残念ながら2000年夏の南仏での国際スポーツ史学会に参加できなかったため、彼との交流を深める機会だけでなく、彼の博士論文を入手する機会も逸した。

さて、グノの2つの論文は、1997年独文の「1921 - 1937年の共産主義労働者スポーツ運動のスポーツ構想。政治的従属とイデオロギー的変転」²⁾と、1998年英文の「革命的要求と外交的必要の間で——1920年から1937年までのソビエトスポーツとヨーロッパの労働者スポーツ、ブルジョア・スポーツの間の容易ならぬ関係」³⁾で、90年代に公表され始めたモスクワ・アルヒーフ資料に基づく研究として国際的にも最新の発表である。

訳稿にして1997年論文も1998年論文もそれぞれ100枚という分量で、全訳紹介したが、それを再録する訳にいかず、今回は1997年論文に限定し、2つの論文で利用されたモスクワ・アルヒーフの資料の確認と利用方法への疑問を提起することにとどめ、1998年論文の詳細な検討とグノの問題視角・理論的枠組みという根本問題については他日を期すこととした。

モスクワ・アルヒーフについて

1997年論文でグノは言う。「この論文のためにモスクワの『コミンテルン・アルヒーフ』——『現代史記録保管記録研究ロシアセンター』（R Z A E D N G）に統合された——の在庫『スポチンテルン（1921 - 1937年）』の文書と記録を利用することができた。R S I事務局によって作られ集められた資料を包括するこの在庫は、国際共産主義労働者スポーツ運動についての世界的に重要な資料集成である。そのほか『連邦アルヒーフ・D D R政党・大衆組織財団アルヒーフ』（S A P M O）（かつての『S E D中央委員会マルクス・レーニン主義研究所』）に見出される労働者スポーツについてのK P D中央委員会の資料が利用し尽された。追加的に利用されたのは『ロシア連邦国家アルヒーフ』（S A R F / R F A）（かつての『10月革命アルヒーフ』）からの資料ならびにR S Iとドイツ・フランス労働運動・労働者スポーツ運動の刊行物である。」

1998年論文では、「調査は特にモスクワのコミンテルン・アルヒーフの最近の開館によって、そしてこれが『スポチンテルン』記録のコレクションに与えてくれたアクセスから助けられた。R S Iビューローからのおよそ6万の記録とともに、このコレクションは、両大戦間期の共産主義スポーツ運動に関する資料の、ヨーロッパの最も豊富なセクションの場所を用意する。ロシア連邦アルヒーフ（旧『10月革命アルヒーフ』）は他の豊富な源泉資料を供給してくれた。特にロシア——後にソ連——身体文化最高評議会の国際委員会からの記録に関してである。」

2つの論文で重複して利用された資料は次の通り。

【R Z A E D N G】 「1921年7月19 - 30日のスポーツインターナショナルの第1回協議会の会議プロトコル」, 「スポーツインターナショナルの第1回協議会のテーゼ、宣言、参加者リスト」,

「ブルジョアスポーツ組織の行事へのロシア労働者スポーツマンの参加についての同志ヴォレンベルガーの所見への若干の論評 [1926年]」、
「国際労働者・農民スポーツ・トゥルネン運動の方向についてのコミンテルン執行委員会のオルグビューローの委員会の覚え書き。1925年2月26日。N. ポドヴォイスキ」, 「ブルーノ・リースケの辞任の手紙。1926年8月」, 「C. アクサミット、スポーツ運動の現在の状態とその今後の発展の展望。1937年1月9日」, 「R S Iをコミンテルンのスポーツ補助機関に変換する決議。1937年4月11日」, 「ソビエト同盟共産党政治局の会議。1937年5月11日」。

【S A R F / R F A】 「赤色スポーツインターナショナルとその執行委員会の活動報告 [1926年]」, 「F I F Aとの往復書簡」。

【S A P M O】 「1925年5月29日の帝国スポーツフラクション会議 [共産主義フラクション指導部会合からの議事録]」、 「ロシア・スポーツにおけるブルジョア化傾向に反対する決議 [1925年]」。

1997年論文のみの資料は次の通り。

【R Z A E D N G】 「機密。E K K Iからロイスナー宛。1924年12月8日」, 「R S IからE K 幹部会メンバー宛。モスクワ、26年4月10日」,

「機密。R S Iの幹部会。26年2月26日」, 「1925年9月10日の赤色スポーツインターナショナルの技術 - 方法委員会の会議のプロトコル第1号」, 「第4回総会 (モスクワ、1928年8月23 - 25日) の会議の速記原稿」, 「第5回プレナムの決議とテーゼ。1929年5月31日 - 6月5日、チャルコフ」, 「第5回プレナムの会議の速記録」,

「コミンテルン執行委員会政治局決議草案 [1929年]」, 「コミンテルン執行委員会書記局。1938年2月16日」, 「モスクワのR S I書記宛。ベルリン、1924年8月26日」。

【S A R F / R F A】 「第3回R S I総会のプロトコル。モスクワ、1924年10月」, 【S A P M O】 「共産主義労働者トゥルナー・スポーツマン帝国フラクション指導部からK PのR Z宛。ベルリン、1923年11月30日」, 「1925年6月11日の帝国スポーツフラクション会議プロトコル」, 「22年5月21日のドイツ共産党中央との労働者スポーツマンの帝国フラクションの会議」, 「28年2月7日、ベルリンでの拡大帝国フラクション会議のプロトコル」, 「K P DのZ K、書記 (政治局) からモスクワの赤色スポーツインターナショナル宛。ベルリン、1925年9月8日」。

1998年論文のみの資料は次の通り。

【R Z A E D N G】 「ドイツ人共産主義者クルト・ラインハルトからポドヴォイスキへの2通の手紙」, 「1924年1月30日、モスクワでのR S I執行委員会の会合からの議事録」, 「身体文化の分野での党の任務。ロシア共産党中央委員会決議 [1925年夏]」, 「R S Iからコミンテルンへの手紙。モスクワ、1923年10月17日」, 「R S I執行委員会の会合の議事録。1924年8月1日、8月20日」, 「1926年5月のR S I拡大執行委員会で採択された東方と植民地でのR S Iの活動についてのテーゼ」, 「R S I拡大執行委員会の会合の議事録、1924年1月30日」, 「ブルジョアスポーツ組織の行事へのロシア労働者スポーツマンの参加に関する所見 [1926年]」, 「赤色スポーツインターナショナルの全てのセクションと共感する組織に (1929年9月のR S I書記からの回状)」, 「全ての支部とR S Iに共感する全ての組織に宛てられた回状 [1929年]」, 「ソビエト同盟共産党政治局のセッション、1936年6月22日」。

【S A R F / R F A】 「フリッツ・ロイスナー、我々の国際スポーツ競技会 [1925年末]」, 「R S I書記から身体文化最高評議会宛て。ベルリン、1932年6月7日」, 「全ての労働者スポーツ組織へ！全ての男女労働者スポーツマンへ！全ての勤労者へ！ [1927年]」, 「R S Iコペンハーゲン・ビューローからモスクワ・ビューロー宛ての手紙、1933年9月28日、11月15日」, 「R S

I書記局（ベルリン）から身体文化最高評議会宛ての手紙、1933年9月28日、11月15日」、1937年1月と6月の間に集められた様々な国際スポーツ連盟からの記録文書を含むボックス。

【S A P M O】「1926年5月25、26日、アムステルダムでのルツェルン・スポーツインターナショナル国際事務局の会合の議事録から」、「W.ゼンガーからK P D政治局宛て。ベルリン、1927年7月19日」、「1927年1月8、9日のワイマールでの労働者競技者地区大会に関するイエナの同志H.リヒターの手紙からの写し」、「ロシア人格闘技の経過に関する報告。シュトゥットガルト、1926年12月15日」、「K P D中央委員会からモスクワの赤色スポーツインターナショナル書記宛て。ベルリン、1926年11月5日」、「1927年7月16日、ドレスデンのD S Vハイムでのドイツ同盟フットボール指導部の協議に関するプロトコル」。

モスワ・アルヒーフだけでなく、ベルリン/ポツダムのS A P M Oにも未開封の資料が存在していたのである。

1997年論文について

この論文は1995年3月のポツダムでのスポーツ史分科会での報告を論稿化したもので、シュピッツァー/ブラウン編『分割されたドイツ・スポーツ』（ケルン、1997年）に収められた。問題の設定は次の通り。——運動の指導勢力がスポーツ実践の機能と造形形式についてどんな観念（構想）を展開したか、競争・成績スポーツへの立場に特別な注意が捧げられるが、およそ特殊な「共産主義的」労働者スポーツを構想する可能性があったか。この問題は確かにR S I研究史において不明なところであった。そのかぎりこの問題設定に基づく資料研究の成果は注目すべきである。とはいえその資料利用の仕方には疑問がある。例えば、序説で1925年のスターリンの「一国社会主義」論と1924年のコミンテルンの共産主義運動の「ポリシェヴィキ化」決議によるR S Iの「コミンテルンの直接的部門」への転化について、それが1930年ベル

リンでの補助的R S I事務局設立でも変化しなかったとしつつ、その資料として「機密。R S Iの幹部会。26年2月26日」を注記するが、その文書内容を公表していないのである。同様に、あるいは最も問題となるものとして1937年春のR S I解散決議の資料利用がある。37年4月11日付けの仏文文書の全文公表をせずに、この決議をソビエトスポーツに長期に高成績スポーツの国際舞台への道を開くためのものと位置づけ、さらにこの決議が公式に知らされず、外国の労働者スポーツマンに幻滅を感じさせないように外部にR S I存続を示唆する措置が取られたと論じ、注記でなおも「記録文書から明確になるのは、この決議でR S Iは実際に解散されたということだ。R S Iビューローはコミンテルンのスポーツ情報局に転換された。解散決議が決して公式に告知されず、モスクワのアルヒーフの公開まで明白な史料証拠を見出すのが可能でなかったため、文献でこれまでR S Iの最期について多種多様な推測しかなされなかったのだ」と言うのは余りに重大である。仏文文書表記の「補助機関への変換」が注記では「スポーツ情報局に転換」と言われるが、注記の文言が文書にあるのかグノの解釈なのか不明である。

最後に、この段階のソ連のアンビヴァレントなスポーツ政策にとって特徴的なものとして1937年アントワープ第3回労働者オリンピックへのソビエト代表団派遣のソビエト同盟共産党政治局決議（1937年5月11日）が取り上げられていることは、今後のアントワープ・オリンピック史論にとって重要な史料であると評価できる。決議は、大平和示威を構想したこの国際行事にソビエト・スポーツの優位を前面に押し出した。ソビエト代表団の勝利と記録への一面的思想傾向へのS A S I内部での批判的評価については我々にも周知のことである。グノは次のように述べている。この時点で国際共産主義労働者スポーツ運動は存在するのをやめていた。S A S Iの存続もコミンテルンによって時代に合わないといみなされた。今こそ大きな民主主義的・反ファシズム的人民スポーツ運動を構築すべき時だと言われた。コミンテルン

幹部会の秘密決議でのR S I解散はコミンテルンの人民戦線政策と関連づけられ政治的に基礎づけられた。とはいえ共産主義的に包装され国際的に規格化された「プロレタリア身体文化」の発展の追求がもはやなされなかったかぎりでもR S Iは時代遅れになったことが書き留められるべきだ、と。この確認は先の仏文史料の全文公開のさいに真に納得いくものとなるであろう。

- 1) André Gounot, Die Rote Sportinternationale zwischen Komintern-Politik und den Ansprüchen des europäischen Arbeitersports. Phil.Diss.Berlin 1998.
- 2) André Gounot, Sportkonzepte der kommunistischen Arbeitersportbewegung 1921-1937.Politische Abhängigkeiten und ideologische Wandlungen. in: Giselher Spitzer / Harald Braun (Hrsg.),Der geteilte deutsche Sport, Köln 1997,S.23f.
- 3) André Gounot, Between revolutionary demands and diplomatic necessity. The uneasy relationship between Soviet sport and worker and bourgeois sport in Europe from 1920 to 1937. In: P. Arnaud/J. Riordan (ed.), Sport and International Politics, London / New York 1988,p.184-209